
けいおん! 超番外編「ギー太!」

P'z

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ 超番外編「ギター太！」

【Nコード】

N0254I

【作者名】

P・Z

【あらすじ】

軽音部、平沢唯は自分のギター、ギター太に愛想尽かされているような気がしてならなかった。そんな時、彼女自身に事件と、奇跡が起こる。唯とギター太のちょっと不思議な物語。

(前書き)

これを読む前に以下の事を前提に読んでください。

- ・時系列はアニメ最終回と番外編の間。最終回の学園祭から3日後。
- ・軽音部メンバーは梓を除きB・Zファン。
- ・擬人化があります。
- ・初投稿です。色々稚拙な面があると思いますが楽しんで見てください。

唯「イツエーイ！ 今日は何だかいい音が出るぜー！」ギャンギャンギャン

彼女の名は平沢唯。1年前に軽音部に入部し、ギターを始めたばかりの女子高生である。今日も今日とて軽音部、改め放課後ティータムの仲間達と練習に励んでいる。

梓「唯先輩、あんまり無茶すぎるとギターに良くないですよ」

澪「そうだぞ、唯。弦が切れても知らないぞ」

唯はサイドギターで1年後輩の中野梓とベースの秋山澪に注意された。

唯「大丈夫だよ、あずにゃん、澪ちゃん。何だか今日は私もギー太も調子いいんだあ！ オーイエーッッ！！」ギヤーーーーン

3日前の学園祭でのライブがうまくいったからか今日の唯は気分がよく、1年前に初めて買ったギブソンレスポールスタンダードのギター、彼女はギー太と名付けたそのギターを無茶苦茶にかき鳴らしていた。

バツンッ

唯「ぎゅいいいいん……！て、あ、あれ………？

ギー太………？」

唯は目を疑った。さっきまで何の異変もなく弾いていた自分のギタ

チュンチュン

そう叫んだ唯の目の前に広がったのは散らかった部屋、窓からは忙しなく鳴くスズメや通勤途中らしきサラリーマン。突如ジリリリリ、と鳴り出す目覚まし時計。その音でハツとなった唯は呟いた。

唯「 ゆ
めえ ? 」

そう呟くや否や唯はバツと部屋を見渡した。そして壁際のギター置きにあるギー太を見つけ

唯「ぎ、ぎいいいいいたあああああつ!!」

と叫んでベッドから飛び移ってギー太にしがみつき大泣きした。普段の彼女からはおよそ考えられない身体能力である。ちゃんと弦があるのかも確かめ、安堵しそしてまた泣いた。

唯「うえええええん!! よかつたよおおおつ!! ギー太、生きててよかったおおおおお ! ! ! 」

憂「 お姉ちゃん、何騒いでるのお 」

唯の泣き声を聞いて部屋に入ってきたのは唯の妹の憂。そしてその光景を見て憂は惚ければいいのか呆れればいいのか戸惑った。

唯「おーいおいおいおい 」
憂「 遅刻 」

. するよ お姉ちゃん
「 」

唯「いやあ〜…………ごめんごめん。ちょっと嫌な夢を見ちゃって……………」

通学路を並んで歩く平沢姉妹。唯の背中にはもちろんギター太が収納されているギターケースが担がれている。そして急ぐわけでもなし二人はゆっくりと歩を進めていく。

憂「どんな夢だったの？」

唯「う〜ん…………私が調子に乗ってギター太をメチャクチャに弾いたら弦が全部切れちゃってみんなにギター太を大事にしないやつはギターリスト失格だつて言われちゃった夢」

憂「それでギターにしがみついて泣いてたんだ……………
……………でも学園祭で大成功した後だけに縁起の悪い夢だね……………
……………」

唯「うん…………だからちよつと目覚めも悪いんだあ……………
よいしょ」

唯はギターケースをおろして自分の正面に向けた。

唯「ギター太あ…………私、ギター太、大事にしてないかなあ……………
……………」

不安げにギターケースに入っているギター太に向かって語りかける唯。
憂「お姉ちゃん……………ふふつ、でもそんな夢を見る程にお姉ちゃん、そのギターが好きなんだね。何だかギターが羨ましいな」

唯「憂、ギターじゃないよお。ギター太！」

憂「ギー太、さん？」
唯「そ！ ギー太！」

超番外編 ギー太！

放課後

音楽室

唯「やつほー……………あれ？」
音楽室へと足を踏み入れた唯。そこにはPCで何やらB・ZのLIVEを見ている漣と律がいてくつろいでいた。

意義あるタイムオブマイ、ライフライライアアアアアア~~~~
くッ!!!!

漣「やつぱはこの稲葉さんのシャウトってシビれるよな、律」

律「へいへい、もう何百回と聞いたな、そのセリフ」

ほとほと聞き飽きたように言う律。

唯「ほほう、B・ZのLIVE鑑賞会ですかおふたりさん」

漣「あ、唯。ちよつとな。バンドの勉強がてらね」

律「単にお前が見たいだけだろー」

漣「そんな事ないぞー。私達だっていつかこれくらいの演奏してやるっ！て前、意気込んだじゃないか」

唯「でも私、稲葉さんのようにあきやきやきやきや〜っ！！なんて叫ぶ自信ないよお……………あれ、このビデオ私初めて見るや」

律「唯が見たのって『BUZZ!!』と『MONSTER'S GLORIOUS DAYS』だけだったっけ？」

唯「うん。曲はそれなりに聴いたんだけどビデオの方はあんまり見る機会ないもんね」

漣「これは93年の渚園でやった『JAP THE RIPPER』LIVEのビデオだよ」

唯「今から16年も前かあ。二人共はっちゃけてるね」

漣「若かったからなあ……………あ、唯。

今から松本さんの凄いパフォーマンスが始まるぞ」

漣にそう言われまじまじと画面に食いつく唯。

Let's drink the night away!!
ア
ーオツ!!

唯「あれ、稲葉さんどっか行っちゃった……………ああ、松本さんのギターソロだねえ……………
……………えっ!? わっ!! ギターから花火が出たっ!! うわわわわわっ!! 色んなところから花火が出て来たよお! 危ないよおっ!! 松本さんそんなに花火振り回しちゃ危な……………て、ええええっ!!? ギターが爆発したあああああっ!!!? え……………ギ、ギターを……………そのまま……………投げたあああああっ!!!?」

ドッカーンッ!!!!

律「ムギー！ 梓ー！！ み、見てないで唯の暴走を止めてくれー
っ！！」
紬「え！？ は、はい！！」
梓「全然わかりませんが、一体どうしたんですか唯先輩！！」
唯「うおおおおっ！！」

何とか唯を取り押さえる事に成功した漣達はせいぜいと息をきらし
て座り込んでいる。唯も既に頭が冷え落ち着いていた。

唯「うう．．．．．皆さん申し訳ありません．．．．．
ちよつと取り乱しておりました．．．．．」
深々と土下座して謝る唯。

律「ハア．．．ハア．．． と、取り乱し過ぎだろ．．．．．
．．．．． 一体あれを見て何をそんなに取り乱す事があつたんだよ．．．．．

唯「うん、実はね．．．．．
．．．．．」
そう言つて唯は今朝の夢の内容をみんなに話した。

漣「なるほどねえ．．．．．ギー太が壊れる夢か．．．．．
．．．．．」

梓「まあ、そんな夢見た後ならちよつと過敏になっちゃいますね」
紬「ヘビメタなどで楽器を破壊するパフォーマンスは当たり前の前
うにあるけど、楽器を心から愛する人にはちよつといただけないも
のがあるものねえ．．．．．」

律「てか私達、やな役で出てるな、その夢に」
4人諸々に感想を述べた。

漣「でも松本さんが爆破したあのギター、今でもボロボロになつて
いながらも保管してるらしいよ。当時は売れに売れてた時期だつた
からちよつとパフォーマンスに熱入れてたんだろうな」

律「調子乗つてたとか言つてたしな」

漣、律のB・Z常連者は松本孝弘のフォローを入れる。

唯「でもお．．．．．ギターにあんな事するなんてギタリストのする事じゃないよお．．．．．ギー太あ、私は絶対しないからね、あんな事」

ギターケースを抱えてそう語りかける唯。

律「いや多分、したくてもできないと思う」

律のするどいつつこみが入った。

紬「まあまあまあまあ、唯ちゃん。ほら、おいしいロールケーキ持ってきたから」

おもむろに高級そうなロールケーキを見せるムギ。

唯「うん、でもプロのギタリストならお客さんを喜ばせるパフォーマンスを積極的にしなくっちゃね」もーぐもーぐ

ロールケーキを頬張りあっさり機嫌を直した唯であった。ずっとける一同。

唯「でも！ 私はしないからね！ 私とギー太は一心不乱！ 死ぬまで一緒にだぜ！！」

漣「唯、それ一心同体」

唯「ありや」

先程の騒ぎもティータイムにかかればあっさり解決。いつもの談笑タイムが始まり、それが30分以上は続いていた。

漣「さて、と。そろそろ始めるか、練習」

立ちあがった漣が練習にとりかかろうとした。

唯「ううー、もうちょっとゆっくりしようよおー」

律「そうだぞ、漣ー。あと3時間はゆっくりさせろー」

梓「練習する気まったくないんですね．．．．．」

漣「じゃあ、まずは唯が前々からリクエストしてた『恋心』のカバ―でも練習しようかな？」

唯「りっちゃん！ 早くドラムの用意をするんだっ！！」

律「お前．．．．．」

唯「じゃ、ギター。この曲、私踊らなきゃいけないからちょっとお休みしてねー、怒っちゃだよー?」

唯はギターをイスの上に置いて子供に言い聞かせるように言った。

唯「じゃ、あずにゃん。リードギターの方はお任せします!」

梓「わかりました」

律「じゃ、行くぞー。1、2、3!」

唯「い・つ・ま・で・も! こ・い・ご・こ・ろっ!!」

チャチャチャンツ!!

漣「. うん、いい感じだったんじゃない?」

紬「唯ちゃんの振り付けもばっちり決まってたしね」

唯「えへへー. あっ! ギター!!」

唯はギターの方へと走り寄った。

唯「あうう. ギター拗ねちゃった.
ごめんね、ほつといてえ.」

漣「拗ねてるって. わかるんかい」

唯「私にしかわからない波長があるんです!」ふんす

律「電波だな。ま、唯とギター太のためにも次は『ふわふわ時間』でも練習しますっか」

漣「そうだな、唯。準備しろ」

唯「やったー! よおし、ギター太、今日初めてのお仕事だあっ!!」

放課後ティータイムの面々はその後、2時間以上は練習に時間を費やし、練習にこれだけ打ち込んだのは随分久しぶりな気がするほどであった。ひどい時はお茶だけして終る時もある。

律「んー．．．．．何か久々に真面目に練習したな」

梓「いつも真面目にしてくださいよ．．．．．」

紬「そろそろ帰らない？ 暗くなるのも早くなってきた時期だし、最近不審者が多いらしいわよ」

律「そーだな。唯、漣。もう切り上げようぜ」

漣「うん、今日は充実した練習もできたし」

唯「おつかれー！」

いそいそと片付けをし、全員帰り支度をする。そして音楽室の戸に鍵を掛け部室を後にした。

漣「じゃ行こっか」

唯「うん。あ、わわわっ！！」

唯は階段をおりたが、足を踏み外してしまい転びそうになった。

律「唯！ 危ない！！」

律と漣は唯の近くにいたので、素早く反応でき咄嗟に唯の体を支えた。二人が唯の体を支えてくれたおかげで階段から転落という事態にならずに済んだ。頭から倒れたので下手したら大惨事であった。

唯「あ、ありがとおー．．．漣ちゃん、りっちゃん．．．．．」

「．

漣「まったく．．．．．気をつけ．．．．．」

「．．．．．唯、ギターは．．．．．？」

唯「へ？」

梓「ゆ、唯先輩！！ ギターがつ！！ ギターがつ！！！」

梓が大声で叫んだ次の瞬間。

ドガッシャンッ！！！！

階段の下から大きな硬い物体が落ちた音が聞こえ全員その音がした方向に視線を寄せた。そしてそれが何なのか気づいた時にはもはや

きました」

唯「う、うう、う．．．．．！！ このご恩は一生忘れませんっ！！」

大袈裟に深々と頭を下げながら、目に涙を浮かべ店員に全霊の感謝を述べる唯。

律「よかったな、唯。大した事なくて」

梓「まあ、東京タワーから落とした、て訳じゃないんだし、そんなに慌てる事でもなかったと思いますけどね．．．」

漣「ところで唯、お金はあるのか？」

唯「あ、うん。今度はばっちりだよ。そう何度もサービスしてもらっちゃ悪いもんね」

胸に手を当てほっと安堵の息をもらす店員。そして店員に改めてお礼を言い、軽音部は楽器屋を後にした。

帰宅途中。

律「梓の言う通り、そんな慌てる事でもなかったよなあ。なんか唯が大袈裟にわんわん泣くもんだから死にかけの人を病院に搬送してのような気分だったぜ」

唯「．．．．．大袈裟．．．．．
．．．．．なんかじゃないよ．．．．．」

あっけらかんと言う律とは対照的に唯は暗い顔と声でそれに応えた。
唯「私のせいで．．．．．ギー太に怪我させちゃったもん．．．

．．．．．どんなに軽い傷でも．．．．．私のせいでギー太傷つけちゃったんだもん．．．．．」

唯は今にも泣きそうな顔をしている。

漣「バカ！ 今朝ギー太を壊した夢見たって言ったろ！」ボソボソ律「あ．．．そっか．．．ご、ごめんごめん！唯！ そうだな、

ギー太は唯の大切な相棒だもん。どんな大した事ない傷でも軽く見ちゃいけないな！」

唯「……………」

紬「ほら、唯ちゃん。ギー太さんも無事だったんだしりっちゃんも悪気あつて言つたわけじゃないんだから……………」

唯「……………ううん、ごめん。その事じゃないの……………
何だか私、ギー太に愛想尽かされちゃつてる気がしたんだ……………」

唯は暗い面持ちと真剣な声色でそう語り続ける。

唯「いつまで経つても大して上達しないし、服とか着せたり添い寝したり、勝手に喜んでるとか決めつけちゃったり……………学園祭の時は忘れてきちゃうし、今日は落としちゃうし……………
…そんなであんな夢まで見て……………ギー太は私に使われるのが嫌なんじゃないかな、て……………私のようなぽけーとしたのがギー太持つ資格なんかないんじゃないかな、て……………
…そんな気がしてならないんだよお……………
……………グスツ」

唯は最後らへんはもう涙ぐんでいた。そんな唯を見て必死に唯を慰めようとするみんな。

梓「そ、そんな事ないですよ！ 唯先輩、合宿の時のように一人でもちやんと練習して腕を上げてるじゃないですか！」

紬「そうよ、唯ちゃん……………一生懸命努力するそんな唯ちゃんとずっと一緒にいるのは他ならぬギー太さんでしょ？」

漣「まあ、服着せたりとかは確かに自己満足だと思うけど、いいだあっ！！」

律は余計な事言うな、と言わんばかりに漣の足を踏んだ。

律「唯、楽器の才能を生かすのは私達、演奏者なんだ。だからギー太の持ち主であるお前がギー太を信じてやらなくてギー太がお前についてくると思うか？ こいつが自分についてきてくれる、だから自分もついていける！ と思う関係こそ相棒、だろ？ もっと自信

もてよ。な、唯！」

珍しく律が真剣な口調と顔で真面目でもっともな事を言い出したのでこの場にいる全員が目を丸くした。

唯「……………うん、そうだね。私がギー太を信じなくっちゃ、ね。ありがとう、りっちゃん！ りっちゃんにしてはいい事言ってくれたね！」

律「私にしては、は余計だ！！」

梓「いやホントにそうですよ」

紬「りっちゃん、B・Zの曲の聴き過ぎじゃないかしら？」

漣「さては律になりすました何者か！？」

律「お前ら……っ！！！」

そんないつも通りのやりとりを見て唯の顔には笑顔が戻った。しかし……………

唯「じゃ、私ここで。みんな今日は本当にごめんねえー」

律「いいのいいの」

唯「それじゃーねー……………」

唯のみ別れ、唯を見送る漣達。そして歩きながら4人で語る。

律「……………唯、まだ気にしてる、て感じだったな」

紬「ええ……………暗さが残ってるテンションだったものね……………」

漣「唯のひとつの事に集中したらそれしか見えない癖が悪いとこで出ちゃったな……………」

梓「……………明日になったら綺麗さっぱり忘れて元気になるといいんですけど……………」

律「唯ならありそうだけど……………でもこればかりは唯自身の問題だな……………」

唯の事を本気で心配する軽音部メンバー。こんな友人が持てて唯は

どれだけ幸せか、しかし当の本人はこの場にはいないのでそれを知る由もない。

だが、仲間達の心配は別の方向で動き出すことになるのだった……

一人、薄暗くなつた帰路を辿る唯。

唯「りつちゃん達に励まされて少しは元気出たけど……でもやっぱり私なんかじゃギー太を使いこなすなんて無理なのかなあ……」

透達が心配した通り、やはり唯はまだ気にしていた。

唯「……うん、ダメダメ！こんなんじゃ！りつちゃんが言ったようにギー太を信じなきゃ！……よしよ」

唯はギターケースを肩からおろして、またギー太に向かって語り出した。

唯「ギー太……ごめんね……こんなご主人様で……」

「あ、あのおー……」
唯「ふあ、ふあいつ!!?」

その時、唯の後ろには男が立っておりいきなり話しかけられた唯は仰天して即座に後ろを振り向いた。

その男の容姿はやや太り気味で、顔もふっくらしてメガネをかけており、髪型はおかつぱで、わかりやすく言うと「相棒」の米沢守を思い浮かべばよい容姿である。息遣いも荒く喋っていない時でもふーふーはーはー言っており、言葉もどもり気味であった。いわゆる世間一般で言うキモオタと呼ぶに相応しい男であった。

唯「あ、あの一……わ、私に何の用でしょうか……」

？」

キモオタ「き、き、君．．．ふうふう　平沢ゆゆ唯さん、だよ、
ねえ．．．．．？」

唯「え？　さ、左様でございますが．．．．．」

混乱しながらも答える唯。

キモオタ「ぼぼぼ、ぼ僕の事．．．知ってるでしょう？　はあはあ
いつもいつもライブを．．．み観に行ってるんだか、ら．．．
．．．ふうふう」

この言葉でこのキモオタは自分達の学園祭などのライブを観にきて
いたお客である事がわかった。しかし唯は当然このキモオタの顔を
知らない。

唯「あ、もしかして学園祭や新歓ライブを観にきてくれた人．．．
？　ありがとうございます〜！　で、でも私、あなたの事は知らない
けど．．．．．」

唯のこの言葉を聞いた瞬間キモオタの顔は強ばり俯いた。

キモオタ「．．．．．去年のが、学園祭のライブで．．．ひ、ひどいよ唯ちゃん
．．．．．めて見た時から．．．．．ぼぼぼ僕は君に一目惚れしして．．
．．．．．はあはあはあ　いい一緒に愛を築き上げようってち
ち誓ったんじゃないか．．．．．！！！」

唯「え．．．．．？　え．．．．．？」

唯はさらに混乱しておどおどします。

キモオタ「そそそそれなのに、きき君はなぜ全然、僕に話しかけ
ようともしないし．．．．．僕のいい家にもききき来てくれない
じゃないか．．．．．！！　だ、だから君の後を尾けたり
り．．．．．家のゴミなんかも持って帰ったりし、してたのに．．
．．．．．！！！」

唯はこの時、初めてゾツと背筋が凍った。危険だ、この人は普通じ
やない。流石の唯でもこのキモオタの行為の異常さやこのキモオタ
自体も危険人物である事を本能的に察した。

キモオタ「あの時の言葉はうとうとう嘘だったのかっ!!?」
ずっとずっとキモオタ君の側にいて演奏してあげるよ』って言うて
く、くくれたのはっ!!? み、みんな溲たん溲たん言う中、ぼぼ
ぼ僕は君だけを．．．!! き、君だけをずとうとうとうと
見ていたんだっ!! あ、あんなわざと転んでパパパパパンツ
を見せるようなビッチ女よりもっ!! 君の方がずとうとうとう
うとうとすす、す素敵なんだとっ!! わかってあげられるのに
いいいいっ!!!!」

唯「や、いや．．．!! わ、私、そんな事．．．言ってな
いよ．．．．．それに溲ちゃんもビッチなんかじゃないよ．．
．．．!!」

唯はやや涙ぐみながらじりじりと後ろへと下がっていく。逃げる、
逃げなくちゃダメだ。本能がそう告げている。この男から逃げなく
ては。唯の頭はその事でいっぱいだった。

キモオタ「．．．．．今日こそ．．．．．今日こそ．．
．．．今日こそ．．．．．わ、わからせてあげるよ．．．
．．!! はあはあ．．．．．僕がいいいい一番君の事を．．
．．ああああ、愛しているかをおおっ!!!!」

そして唯が頭の中で思い描いていた最悪の事態をこのキモオタはつ
いに行動にうつした。そう、襲いかかってきたのだ。

唯「や、やだあああああっ!!」
唯は全力で逃げた。唯はそこそこ運動はできるがものすごく速いと
いうわけじゃない。しかしそれでも彼女なりの全速力で走っている
つもりで逃げたのだ。

唯「誰かっ!! 誰か助けてっ!! 助けてえええっ!!」
唯は走りながら大声で助けを呼んだ。しかしここは人通りが少なく
家も見当たらない道路。助けが来るという希望はまず持てない。
唯の足はどちらかと言うと遅めだがそれでも追いつかれないのは、
キモオタの方も運動などまったくしてないので鈍足だったからだ。
そこは唯にとって幸いだったが、それでも唯の足ではキモオタを振

ギー太を初めて楽器屋で見つけた時、ギー太を初めて買った時、ギー太を初めて持って鏡の前でポーズを決めた時、ギー太を初めてみんなの前でアンプを通して弾いた時、ギー太を初めて観客の前で披露した時、先日の学園祭でギー太を忘れてしまい急いで取りに行った時、大好きなみんなと共にギー太を演奏してる時……

ギー太と共に過ごした時間が一気に唯の頭になだれ込んできた。

「……私……ギー太にはいつも助けられてた。ギー太がいないと私、演奏も何にもできない。ギー太がいるからみんなと一緒に演奏できて軽音部にいられるんだ。みんなと楽しい時間が過ごせるんだ。」

それはギー太がギターとして存在してるから。私がギー太をギターとして扱ってるから。でも私はギー太に何にもしてあげてない。それどころかメンテナンスもろくにしないで、勝手に服着せたり、添い寝したりしてるだけだし、今日みたいに落とすしちゃうだけだった……

そんなギー太を私は、今何をするつもりで握ってるの？

ギー太は私やみんなと一緒に演奏してこそギー太で。ギー太は演奏している時が一番輝いていて……

そんなギー太を人に対して振り回すだけなの？私は……

唯「．．．．．できないよお．．．．．
．．．！ だってそんな事したらギー太また痛がつちゃうもん．．．
．．．！ ギー太もそんな風に使われたくないと思ってるもん．．．
．．．．．！」

唯は大粒の涙をこぼして呟いた。ギターは演奏するためのもの。人を傷つけるために使うものではない。唯はギー太をあくまで「ギター」としていさせたいのだ。もはやギー太は唯の「相棒」なのだ。相棒をそんな事に使いたくない。唯はそう思いギー太を構えるのをやめ、ギー太に抱きついて泣いた。

キモオタ「はああ．．．．．！ 唯ちゃん．．．．．ここ、ここにいいいいんだねえええ．．．．．」

唯にとつて悪魔の音が聞こえた気分だった。唯の背後には既にキモオタが立っており、その荒い息をさらに荒げて不気味な笑い声をあげていた。

唯「あ．．．．．！ や、いやっ！！ やだあああっ！！」

唯は泣き叫び逃げようとした。しかしこれだけの近距離で逃げられる確率は0。腕を掴まれついに唯はキモオタに捕まってしまった。

唯「やだっ！！ やめてえっ！！ 誰か、誰かたす．．．ムグツ．．．．．!?!」

唯は精一杯の声を出して助けを呼ぼうとしたが何か布状のものを鼻と口に押しつけられた。

キモオタ「はああはああ．．．ごめんねええ．．．．． ききき君があんまりててて照れ屋なもんだから．．．．．この強力なお薬でちよつとね寝てもらおうね．．．．．ぜえぜえ．．．．．」

薬品の臭いを嗅いでしまった唯は体中の力が抜けてその場に倒れこんだ。

キモオタ「フヒ、フヒフヒヒヒ．．．．． ゆゆゆ唯ちゃん．

ええええっ！！！！」

スタンガンを全く恐れず近寄ってくるその男にキモオタは逆に恐怖して、スタンガンを男の胸目がけて突き立てた。

しかし男は右腕でキモオタのスタンガンを持つ腕を目にも止まらない速さで横へと逸らした。キモオタはまったく反応できなかった。

まさにD I Oを前にしたポルナレフのような感覚だったであろう。

「……………は？」

と思う頃にはキモオタは宙を舞っていた。腕を逸らされた次の瞬間には男の強力な回し蹴りがキモオタの脇腹目がけて炸裂し、キモオタはゴミクズのようにぶっ飛んでいったのだから。

キモオタ「ごべしやあああっ！！！！」

そのまま木に激突したキモオタは北斗の拳のやられ役のような叫び声をあげ気を失った。

だ……………れ……………？

唯はまだかろうじて残っている意識の中、今の光景を見ていた。唯はこの男の事を知らない。見た事もなかった。

しかし何故だか唯はこの男に対して安心感を持っていた。それはいつも学校で楽しく会話する澁達と一緒にいる時と同じような感覚であった。

そして男は唯の目の前にまで寄ってきた。

ここで唯の意識は完全に途切れる事となる。

「お姉ちゃん．．．．．お姉ちゃん．．．．．！
！ お姉ちゃんっ！！」

唯「ほやっ！！？」

唯は目を覚ました。

唯「．．．．．ふえっ？」

あたりを見渡す唯。周りには涙を流す憂、唯が起きた事に驚く漣、
律、ムギ、梓、唯の幼馴染みの真鍋和、軽音部顧問の反面教師山中
さわ子と白衣を着た医者らしき男がいた。
そして自分が病院のベッドの上にも気づいた。

憂「．．．．．お．．．．．お姉ちゃんあ
ああああん！！ うわああああん！！」

憂は号泣しながら唯にしがみついた。

漣「よかった．．．．．本当によかった．．．．．」

律「心配させるなよおっ！！ このバカッ！！ うう．．．．．ホン
トよかったよお．．．．．！！」

唯「唯ちゃん．．．．．うう．．．．．」
涙を流して唯の意識が目覚めた事に喜ぶ漣、律、ムギ。

梓「先輩．．．．．！！ 本当に．．．．．どこまで
人を心配させれば気が済むんですかっ！！ もう．．．．．！！
！」

叱りながらも涙と安堵の笑みを浮かべる梓。

唯「．．．．．えと．．．．．

．．．．．何があつたんだっけ．．．．．

．．．．．」

唯のこのセリフに拍子抜けする一同。

和「唯．．．．．あなた、道端で倒れてるところを通行人の人が見
つけてくれて病院に運ばれて来たのよ．．．．．薬品で眠ら
されてるだけだから命に別状はないだろうけど万が一もある、て言
うから．．．．．1時間は眠ってたのよ．．．．．」

今の状況を冷静に説明する和だがやはりその目には涙が浮かんでい
る。

さわ子「私達はすぐに病院から報せを聞いて飛んできたのよ。ホン
ト．．．唯ちゃんが倒れたって聞いた時には生きてる感覚しな
かったわよ．．．．．あんまり大人を心配させないでよね」

さわ子もまた今までの緊張がほぐれたようにあっけらかんと言つ。

唯「．．．．．そっか．．．．．！ わ、私．．．

．．．怖い人に追いかけて．．．．．」

和達の説明でさっきの自分の状況を思い出す唯。それと同時にあの
キモオタを思い出しゾツとした。

漣「あつ．．．．．や、やつぱり一緒に倒れてたつて男に襲わ
れたんだな！？ 唯！」

唯「うん．．．．．私の事好きだから、て．．．．．私
すぐく怖くつて必死に逃げてきたんだよお」

これを聞いた憂の表情が強ばった。

憂「お、お姉ちゃん！！ 何もされなかった！？ な、何かひどい
事．．．．．！！」

そして血相を変えて唯に問う憂。

唯「ううん．．．私、眠らされちゃって．．．
でも．．．その後．．．えっと．．．
．．．」

律「やっぱあいつが犯人だったか．．．！ あいつはお前を襲った不審者の可能性が高い、て事で警察に取り調べされてるらしいよ。でもあいつ、何で倒れてたんだよ？ 唯がぶつとばしたのか？」

唯「できるんだっけだったけど．．．私じゃそんな事できな．．．あっ！！」

律の言葉に唯は思い出した。

唯「ギー太っ！！ ねえ、ギー太はっ!？」

血相を変えて澪達にギー太の事を聞く唯。

澪「ギー太なら．．．お前のすぐ側に落ちてたからちゃんと保管してあるよ。安心して。傷も大してついてなかったよ」

澪が指さした先の壁際にはギターケースに入っているギー太があった。

唯「うう．．．よかったあ．．．!」

梓「あ、ギターと言えば．．．さっき警察の人から聞いたんですけど．．．あの通りって人家もあんまりなくて人の通りも少ないから滅多に人が来る事はないらしいです。でも、唯先輩が倒れたあの時．．．ギターの音が何度も聞こえてきたらしくて近くを通りかかった人が見に来たら唯先輩と犯人の男が倒れてたそうです」

医者「発見が遅かったら少々危なかったかもしれないんだよ」
梓の説明に補足を付け足す医者。

律「不思議だよなあ．．．唯は倒れてるんだからギターなんて弾けるわけないし、誰か来てくれてギターを弾いて助けを呼んだ、ていうのもちよっと考えづらいし．．．」

澪「第一、あんなアンプも何も無いところで周りの人が聞こえるく

らの音なんか出ないし．．．．．」
細「それに、何であの犯人の男が気絶していたのかも気になるわね．
．．．．．」

うーん．．．．．とこの不思議な出来事にみんな考え込んだ。

医者「まあ、君もこうして無事だったんだ．．．．．とりあえず
今夜はこの病院でゆっくりしていきたまえ。平沢さん。お友達や先
生に感謝しなさい。君が起きるまでずっとついていてくれたんだか
らね」

唯「うん．．．．．みんな。本当にありがとう!!」
深々とお辞儀をする唯。みんなはそれに笑顔で応えた。

その後は妹の憂だけが残り、遷達は全員帰っていった。仕事の関係
で遅れてきた両親も唯の無事な姿に号泣した。警察の事情聴取は明
日になると聞かされ、憂も両親もとりあえず帰宅した。

23時頃。やっと落ち着いた唯はベッドで寝転び目を閉じ眠りにつ
いた。そしてあの出来事を振り返る。追いかけられた恐怖はもちろ
んだが、何かひっかかるもやもやとしたものがあつた。

唯「不思議だなあ．．．．．アンプも弾く人もいないのにギー太
が鳴るなんて．．．．．ん？あれ？私、道端で倒れてた、て
言われたよね．．．．．？おかしいな．．．．．私、あ
の人に眠らされたのって林の中なんだから私が見つかるのって道端
じゃおかしいんじゃないか．．．．．？それにあの人も私と一緒
に道端で倒れてたっけいし．．．．．」

そう、唯が薬品で眠らされたのは林の中での事。ここまでは意識が
はつきりしてるので記憶もちゃんと残っている。

唯「だったらりっちゃんと言ったように誰かが助けてくれて私やあ
の人を道路のどこまで運んでくれたのかなあ．．．．．で

その男は唯を抱え道路まで出て来た。唯を床にそつと置く男。そして男は林に戻り唯の側に倒れていたキモオタも運んできてそこからへんに放り投げた。あたりを見渡しても誰も来る気配はない。しかし遠くから人がいる気配はした。

男は唯のポケットからピックを取り出し、そのピックを右腕にある糸に擦り付けてかき鳴らした。その音はアンプを通したようなギタ―の音色であった。

何度も何度も鳴らすうちに通行人もその音に気づいたようでこちらに近づいてくる。

男は安堵の笑みをもらし、ピックを唯のポケットに返した。そして倒れている唯に対して男は何か言った。

その内容とは――

~~~~~

唯「ぼんばあつ!？」

ベッドから飛び起きた唯。唯の目の前にはいつもなら見慣れた散らかった部屋が広がるはずだが今日は違った。見慣れない白い部屋。窓には忙しなく鳴くスズメ。出勤途中であろう何台もの車。その景色はいつも自分の部屋から見えるものとは違う。時計を見ると7時。そして唯は寝ぼけた思考回路をフルに回転させ昨日の事を思い出し自分が何故病院のベッドで寝ているかを思い出した。それと同時に。

唯「.....そ

つか・・・・・・・・・・・・・・・・あの人って・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・・・・・・・」  
あの夢の内容も。

放課後、部室。

律「昨日、唯を襲ったヤツ。取り調べで変な事言ってたらしいぜ。唯を眠らせた後、変な男が来て蹴り飛ばされたー、て。でもあそこって人通り少ないじゃん。あんなところに人がいるってのもおかしいし、あそこには唯とあいつくらいしか人がいた痕跡がなかったんだって。それにそいつが助けてくれたにしてもそいつが警察に連絡なりすればいいものををしなかつたんだしさ。まあ、頭のおかしいキモオタの言う事なんかあてにならないしな」

紬「でもその犯人、何故気絶していたのかしら・・・・・・・・？ やっぱり誰かが助けてくれたんじゃない？」

律「あのキモオタが勝手に転んだんじゃない？」

梓「あ、でも林の方で争った形跡がある、とも言ってましたよ？

なら何で先輩は道路で倒れてたんでしょうね・・・・・・・・  
「？」

漣「・・・・・・・・・・・・・・・・なんか・・・・・・・・  
・・・・・・・・ミステリーだな・・・・・・・・」

不安げに言う漣を見て律は何か閃いた顔をした。

律「そういや、漣・・・・・・・・あそこにはな。昔レイプされて殺されたって女がいたんだ。以来、あそこには女の霊が出るって噂で誰も近寄らなくなった。今でもあそこで女性を襲おうなんて男が現れたら、女の怨霊がな・・・・・・・・！！！」

「ギャー・・・・・・・・！！！」

叫ぶ漣。怖い話が苦手な漣は耳を塞いでぶつぶつ言いながら縮こま

った。

梓「律先輩．．．．．溇先輩からかうのやめてくださいよお」

紬「そんな逸話あったかしら？ あそこに」

律「いや、でたらめ。あ、でも．．．．．さわちゃんが言

うにはあそこでギターやってた女の子が交通事故で死んじゃって．

．．．．．ギターも大破しちゃってて女の子は壊れたギターを抱きし

めながら、ごめんね、ごめんね．．．．．て泣いて眩きながら死んでい

った．．．．．て話があるって．．．．．」

溇「いやあああーっ！っ！」

また叫び、さらに縮こまる溇。

梓「だからあんまりからかわないでくださいってば．．．．．」

．．．．．」

律「いや、でもこれはマジらしいよ。さわちゃんも結構真面目な顔

して言ってたしうちの両親も知ってたし．．．．．もう10年以上

も前の事らしいよ」

紬「ともかく溇ちゃんがいるところではこの話しない方がいいわね．

．．．．．」

ぶるぶる震える溇。そしてそれを見てけらけら笑ってる律。いつも

通りの軽音部の風景に見えるが今この場には唯がない。退院の手

続きや事情聴取などで遅れてくるらしく、放課後まで結局来なかつ

たのだ。

唯「やつほーっ！っ！ 唯軍曹、復活でありまーす！！」

バン、と勢いよくドアが開けられいつになくハイテンションな唯が

現れた。

律「唯！ もう大丈夫なのか！？」

唯「うん。体に異常はない、て。でもお巡りさん達から色々聞かれ

ちゃって参った参った」

唯が無事な事に律、ムギ、梓は心から安心した。そして殻に閉じこ

もつてた溇も復活、唯の復帰に喜んだ。

紬「ねえ、唯ちゃん。あの時、本当に誰も助けに来なかったの．．．

「．．．？ 私、どうにも気になって．．．．．」  
律「うん、私も気になる！ 唯、どうなんだ？ やっぱレイプされた女の霊が．．．．．」  
漣「ひっ！！」  
梓「だからその話は．．．．．」

唯「私の相棒が助けてくれたんだよっ！！」

唯はこう答えた。

みんなはきよとんと唯を見つめていたが、唯は気にせず席についた。唯「さて、と！ もうこの話はおしまい！ ムギちゃん、お菓子とお茶ください！！」

やけに上機嫌な唯に惚けるみんなだったが唯らしいとも感じ、クスリと笑みが漏れたのだった。

紬「そうね。今日はマロンケーキを持ってきたの、早く食べましょ」  
律「お！ 栗かあ！ いいね、早く食べよ食べよー！」

漣「．．．．．まったく昨日はいい練習できたのに．．．．．」  
梓「．．．．．これが終わったらちゃんと練習しますよ？ 皆さん！」

昨日の事件の事はもう問うまいといつものティータイムが始まる。それがまた30分続いた時、練習の時間が始まった。

漣「そう言えば唯、昨日ギー太の気持ちがどうか言っていたけど．．．．．ちゃんと弾けそうか？」

唯「もちろんだよっ！！　だってギー太は私の『相棒』だもんっ！！」

時間は遡り、唯が退院して事情聴取を終えた時に戻る。自宅に着いた唯は真っ先に自分の部屋へと向かった。そして憂が持ち帰っていたギー太を抱きしめ、唯は言ったのだった。

唯「ありがとう、ギー太！　こんな私で．．．．．これからも色々迷惑かけちゃうかもだけど．．．私達は相棒！だからね！　これからもよろしくお願いしますっ！！」

授業には出れなかったが部活だけでもしたい唯はそのままギー太を担いで学校へと走る。大好きなみんなと大好きな時間が待っているから。大好きなギー太と共に最高の時間を過ごせるから。平沢唯はただ走った。

そしてあの夢でー！ー！ー！

いや。昨日、あの男に言われた言葉を胸に焼きつけて。

「いつも大事にしてくれてありがとうな、唯」

昔、あの場所でギターが大好きだった女の子が亡くなって以来、あの場所に行くとか心から大切にされ、愛されているギターが人の姿を借りてその想いを持ち主に伝える、という逸話が噂されるようになるのは随分後のお話である――――。

おわり！

(後書き)

別に僕はデスメタルなどで楽器を壊すパフォーマンスに文句をつける気はありませんが、唯のようにギターに名前をつけたり服を着せたり一緒に寝たりとそこまで大事にしていればいつかギターだって恩返しにきてくれるんじゃないかな、という気持ちで書きました。ただ鶴の恩返しのように面と向かって会いに来たよーなんて事はしたくなかったから、こういうありがちな形に。

唯もそうですが、B・Zの松本さんが「ギターがなければ僕はここまで来れなかった、だからこいつには本当に感謝している」という発言をしていましたが、こういうただの物を一人の人間のように扱ってくれる言動はどこかじんときるものがあります。今度はもしかしたら溲のベースの話も書くかもしれません。

ここまで付き合ってくださいの方、本当にARRIGATOございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0254i/>

---

けいおん! 超番外編「ギー太!」

2010年10月11日20時11分発行